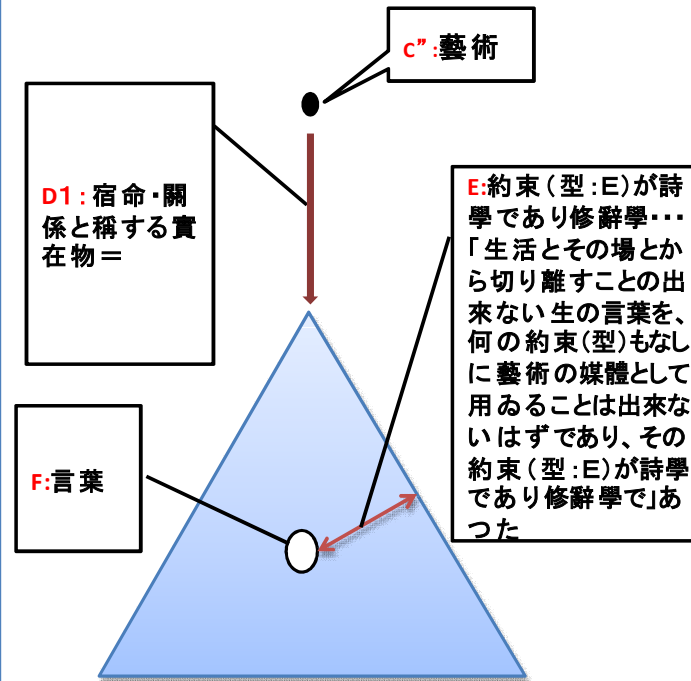


場 (C) から生ずる、「関係 (D1) と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ (問答・對話・獨白・言葉) によつて表し得る」。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方 (型・E の形成 = 「型にしたがつた行動」) によつて、人間は場との関係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



* 修辭學と絶縁後の、散文作家に「散文の限界」(浪漫主義時代)。⇒

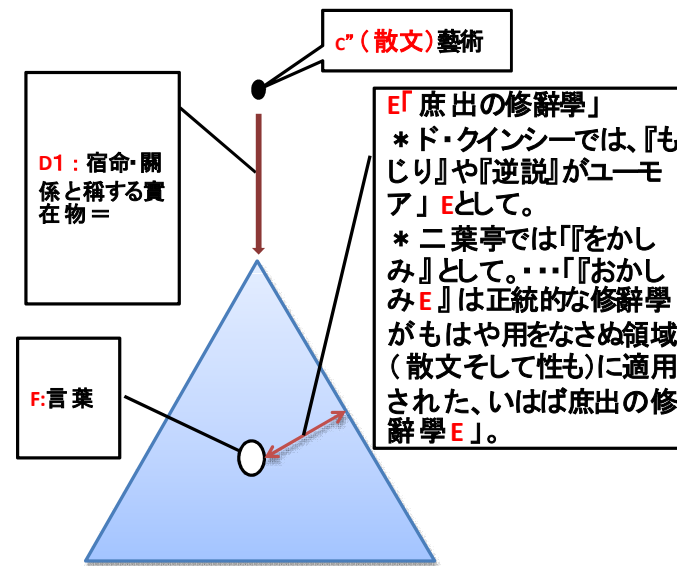
* ⇒ 即ち「詩學や修辭學に頼れぬ」と言ふことは、「散文では歌へぬ」と言ふことを指す。

* 約束 (型: E) が詩學であり修辭學... 藝術を志向する限り散文は、型即ち約束 (E: 詩學・修辭學) と絶縁しては、歌うこと (藝術の本質と言ふ事か?) が出来ないと言ふことである。

何故ならば、「生活とその場とから切り離すことの出来ない生の言葉を、何の約束 (型) もなしに藝術の媒體として用ゐることは出来ないはずであり、その約束 (型: E) が詩學であり修辭學で」あるからだ。

* 「言葉が何ものかを描寫し表現しうるものであるとするならば、その何ものかは現實の特殊な事實ではなく、理想 (C) の普遍的な型 (E) であつて、詩學や修辭學は専らそれを表現するための技法 (即ち E) なのである」

場(c")から生ずる、「関係(D1)と稱する實在物は潜在的には一つのせりふ(問答・對話・獨白:言葉)によつて表し得る」。故にその言葉との附合ひ方、扱い方(型・Eの形成=「型こしたがつた行動」)によつて、人間は場との關係の適應正常化が叶へられる」と言ふ事になる。



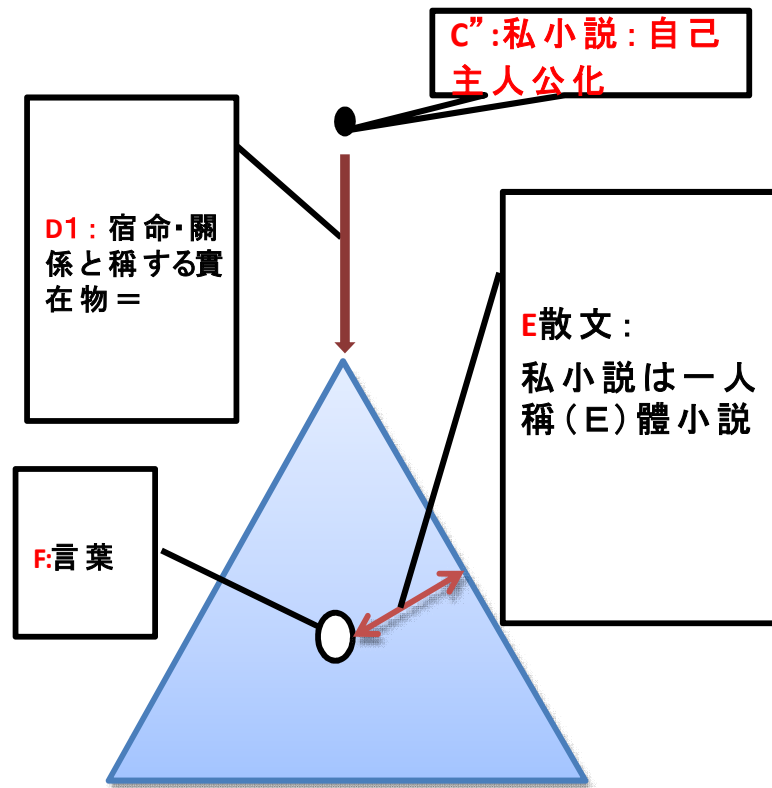
E「庶出の修辭學」…

「『もじり』や『逆説』がユーモア や、『をかしみ』は正統的な修辭學がもはや用をなさぬ領域(散文そして性も)に適用された、いはば庶出の修辭學(E)」と言ふ事であらう。

何故ならば、「事實は語るべきものではなく、ただ在るもの」(62上)⇒故に「現實のうちには、修辭學の手の届かぬ領域といふものがある。厳密に言へば、現實とはすべてさういふもの(修辭學の手の届かぬ領域)なのだ。

現實は言葉のうちにはない。言葉は現實を現さない」(62上)⇒故に散文藝術では『をかしみ』(庶出の修辭學:E)で歌ふ以外に手はなかつたと言ふ事であらう。

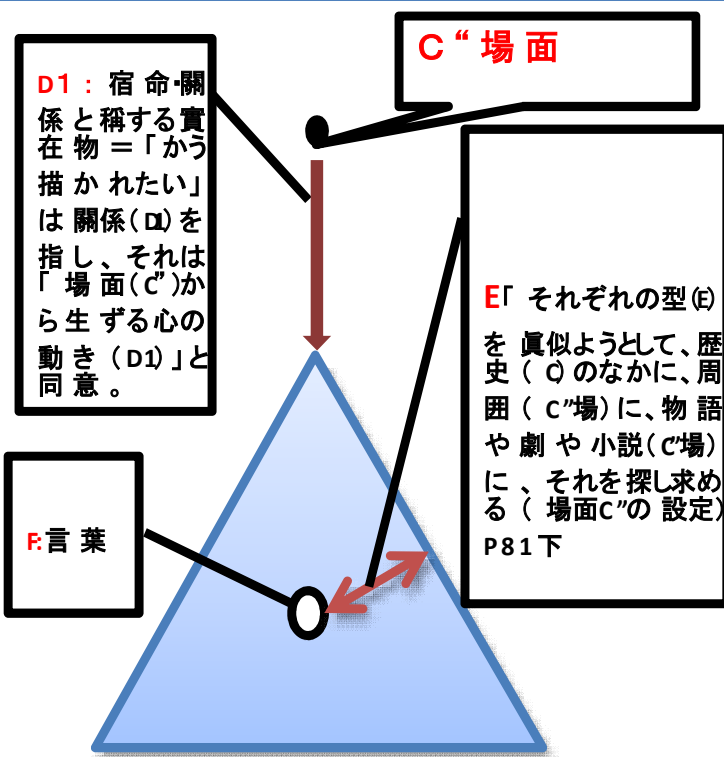
* 以下圖は日本の自然主義文學
(私小説)の場合の「E・C」



* 散文藝術における彼我の差(C"及びEの差異)。即ち以下は、散文における、**修辭學缺如に對應する爲の方法論**と言ふ事か？

	C"	E(型)
西歐近代小説	神の代わりに自己(自己完成)	散文(E)小説
私小説	自己主人公化(自己陶醉)	一人稱(E)體小説
漱石	背後の道德(C)	文學は遊び(理屈Eによる遊び)

場（c）から生ずる「関係（D1）」と稱する實在物は潜在的には一つのせふ（問答・對話・獨白・言葉）によって表し得る。故にその言葉との附合ひ方、扱ひ方（型 E の形成＝「型にしがった行動」）によつて、人間は場の關係の適應正常化が叶へられると言ふ事になる。



* 「チューホフは登場人物がそれぞれにかう描かれたいといふ姿勢を知つてゐて、その肖像を彼等が欲するやうに描いた」(P78上)とは何を言はんとしてゐるのであらうか。・・・「かう描かれたい」は關係(D1)を指し、それは「場面(c)」から生ずる心の動き(D1)と同意なのである。それ故に「かう描かれたい: D1」は、シェイクスピアの自己劇化(D2)の「裏返しをもくろんだ」と言ふ前出文に繋がつていく。

* 「本人の意識を無視して、物(對象F)としての彼をとらへうと言ふ盲信は、實證科學の影響であらう。私たちはまだそれから自由になつてゐない。(中略)すべてを物(對象F)として寫しとり、物(對象F)としてしか寫しとれぬといふ實證科學は、ただその延長線上に意識を(物Fとして)發見しただけのことなのである」(P78下)